

研究ノート

陸上競技選手の競技価値観に関する一考察 —山口県最初のオリンピック選手・阿武巖夫（1909-1939）に着目して—

○岡崎祐介*1 國木孝治*1

キーワード：陸上競技、短距離走、競技スポーツ、トップアスリート、競技価値観

1 はじめに

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けて、スポーツ界の動向に注目が集まっている。スポーツにおいて高い競技レベルでパフォーマンスを発揮する競技者をトップアスリートと呼ぶが、彼らは常に過去の自分自身または先人が打ち立てた記録と対峙しながら、過酷なトレーニングに打ち込んでいる。また、そういったトレーニングに耐えてきたトップアスリート達が競い合い、勝利や栄誉のために競技に取り組む姿は、人々に夢や感動を与えるなど、スポーツへの関心を高め、スポーツの振興および社会の形成に大きな影響を与えながら、スポーツの価値を高めている。

しかし、スポーツは時に商業主義と密接に関係し、勝利や栄誉に多大な利益が付加され、ドーピング問題やハラスメント行為など競技者や関係者が自らスポーツの価値を乏しめる状況がおこっている。このような勝利至上主義の弊害は、競技者個々の競技に対する価値観に非常に大きな影響を与えているといえよう。

スポーツ選手の競技に対する価値観については、時代の変化とともに幅広く変化してきた。岡部¹⁾は、「競技者には、勝利や名誉によって規定されるアイデンティティが敗北や挫折によって否定され、バーンアウト（燃え尽き症候群）やドロップアウト（中途離脱・引退）などの問題を引き起こす可能性が指摘され、その究極的な状況として死にまで至ることが考えられている」と述べており、競技者のアイデンティティ形成における危機的状況の究極的な事例として、マラソン選

手の円谷幸吉を挙げている。このような問題状況には、競技者に勝利や活躍を過度に期待するような社会の構造があり、競技者はこの構造に否応なく組み込まれていくことが想定される。

さて、その円谷が誕生する前年に非業の最期を遂げた萩市出身の陸上選手がいる。山口県最初のオリンピック選手となった阿武巖夫（1909-1939、以下「阿武」）である。阿武は短距離選手として、1932年にロサンゼルスで開催された第10回オリンピック大会に出場し（出場種目は100mと400mリレー）、400mリレーで5位入賞を果たした。当時の日本は、いわゆる「スポーツ狂時代」といわれ、積極的にスポーツが取り上げられ、国家政策としても利用された時期にあたる。

そこで本稿では、山口県最初のオリンピック選手である阿武巖夫の事績や言説を手がかりとし、阿武の陸上競技に対する価値観について社会的背景との関連から考察する。なお、本稿では、阿武自身が残した論考と阿武の生涯についてまとめられた著書の分析を主たる方法とする。

2 先行研究の概観

2-1 山口県の陸上競技の歴史

山口陸上競技協会によると²⁾、協会の発足とその経過について下記のようにまとめている。

(1) 山口陸協発足の背景

・明治18年、山口中学は当時の海軍兵学寮、大学予備校や札幌農学校などで外国人教師指導のもと

*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

に行われた運動会をまね、いちはやく運動会を行った。これがきっかけとなり各師範学校付属をはじめ一般尋常高等小学校へと波及していった運動会が、陸上競技の萌芽といえる

- ・大正、昭和へと進むにつれて山口県人の競技力は飛躍的に向上し、縄田尚門 (大正 14・マニラ極東大会 1500 米優勝)、田島直人 (昭和 11 年・ベルリン五輪三段跳優勝)、田中弘 (全前・走高跳 6 位)、阿武巖夫 (短距離) 等の国際的・全国的選手を輩出、彼等が陸上山口の先兵となり土台を作った。
- ・ベルリン五輪等の刺激により本県においても県体育大会や県外を含めた広域の競技会が開催され、競技人口の層が広がった。戦時色にぬりつぶされた世情ながら世話役も競技者達もよく堪えた。このような状況下、県東部では津脇伴行 (昭和 10・防長クラブ) が徳山を中心として、県西部では立脇政一 (昭和 8・山口陸協即下関陸協) が下関を中心としてそれぞれ組織をつくり献身的な活動をした。この活動が実のり終戦後中央における陸上競技復活の気運台頭と相呼応することになった。即ち、疎開で郷里宇部市に居を移していた縄田尚門を筆頭として田中弘、津脇伴行等が県陸上界復活へ立ち上った。特に津脇伴行は終戦の年の冬から県の東西を駆け巡り同志を糾合し、翌 21 年 2 月にようやく県の統一した組織づくりにこぎつけた。

(2) 発足の経過

- ・日本陸上競技連盟山口県支部として
日本陸連は昭和 20 年 11 月 6 日、東京銀座の交詢社で「再建準備会」を持ち、戦時色を一掃し民主的で誰からも強制されない陸上競技を一日も早く復活する決議をし、12 月 9 日「復活陸上競技会」を開催した。これには本県から田中弘、河岡徳寿が参加した。この中央の機運を受け山口県も自主的に、いち早く昭和 21 年 2 月 17 日徳山市で県下の愛好者が集まり「山口県支部」としてのうぶ声を挙げた。ここに一応の規約づくりが出来、役員

も (会長一青柳一郎) (副会長一縄田尚門) (理事長一津脇伴行) というメンバーが内定、発足をみた。しかし、この時点では「山口県支部」という県内部の組織づくりといった段階で、正式に日本陸連に直結した加盟団体ではなかった。

(3) 山口陸上競技協会の発足

日本陸連は、翌年の 22 年地域支部組織制を廃止することを決め、各都道府県単位で、日本陸連に直結する加盟団体を組織することになった。これは前年度に誕生した第 1 回国民体育大会の反省 (第 1 回の京都では国体と選手権を兼ねたもので個人単位のものであった。) から第 2 回の石川国体から日本選手権を最高の条件で行うと同時に国民体育大会を都道府県対抗の形式に改めるように組織、整備されたためであった。このようないきさつから本陸協も国体をはじめ全国的大会に日本陸連加盟団体として正式に参加したのである。そして宇部市陸上競技場において「全日本招待陸上競技大会」が山口陸協主催で行われた際、開会に先立ち初代会長青柳一郎 (当時山口県副知事) の推戴式が行われ、ここにおいて名実共に山口陸上競技協会の発足をみるに至ったのである。

- ・ときに昭和 22 年 11 月 16 日午前 10 時であった。

2-2 「価値観」とは何か

「価値観」は、心理学や社会学等の様々な学問領域で研究対象として扱われている。また、学問領域のみならず、日常の場面でも価値観という言葉は多用されているため、「価値観とは何か」という問いに明確な答えを出すことは難しい。広辞苑 (第 7 版)³⁾によると、価値観とは「何に価値を認めるかという考え方。善悪・好悪などの価値を判断するとき、その判断の根幹をなす物事の見方」であり、ここでも価値観が漠然とした概念であることがわかる。つまり、人々を取り巻く環境や物事に対する考え方や感じ方を価値観という言葉で総合的に表していると考えられる。

花井⁴⁾は、価値観の3つの特徴をあげ、その研究意義について下記のように述べている。

- ①価値観が「個人・集団の意思決定・行動への影響力」を持つゆえに、価値観を研究することによって、そこで生活する人々や集団がどのような判断をし、どのような行動をとるか理解することができる。
- ②価値観が「集団の人間関係の調整機能」を持つことから、ある集団における人間関係のあり方を解釈することができる。
- ③価値観の「文化における共通性」の特徴ゆえに、ある個人や集団がどのような価値観を持っているかについて研究することで、その個人や集団が属している文化のあり様を知ることができる。

以上を踏まえると、本稿で焦点化する阿武の競技価値観とは、阿武が育った環境や人間関係、当時の陸上競技の様子といったものを総合的に考察する必要があるといえる。

2-3 スポーツにおける「競技価値観」

スポーツ心理学やスポーツ社会学の研究領域では、競技者の価値観に関連する研究成果は散見されるがその数は未だ少ない。ここでは、スポーツにおける競技価値観（競技観）についての先行研究を取り上げ、その成果と課題について検討する。

亀田⁵⁾は、スポーツの価値観はスポーツを実施することから生じる価値観とは限らず、スポーツ観戦やスポーツ評論家の言葉により植付けられるイメージも価値観を構築する一端となるとしている。そこで亀田は、スポーツの価値観をスポーツ全般に関する価値観とスポーツ専門競技種目の価値観（競技することに生じる価値観）とに分類し、後者を「競技価値観」としてその測定尺度の開発をしている。その結果、競技価値観は「社会性育成因子」「競技への愛着因子」「修練による人間形成因子」「勝利志向・承認希求因子」「生命尊重・美的因子」「健康志向因子」の6項目から構成されていると述べている。さらに亀田は、競技者の属性及

び競技の形態や環境等の違いが競技価値観に反映しているとし、中でもスポーツと武道による競技価値観の違いが大きいとしながらもその要因については今後の課題としている。

永木⁶⁾によれば、戦前の柔道に対する価値観を体系的に確立したのは言うまでもなく嘉納治五郎であるが、それが体系づけられる過程においては、江戸期の柔術における価値観（例えば、「柔よく剛を制す」や「武術性」）を取り込んでいると述べている。また永木は、柔道のアイデンティティに関わる重要な問題として「体重制」に焦点を当て、競技観ごとに4つのカテゴリーに分けその特徴を下記のようにまとめている。

- ①「保守型」…戦前以来の「柔よく剛を制す」や「精力善用・自他共栄」という理念に固執し、「体重制」は、実質的にそれを変えることになると反対。
- ②「革新型」…アメリカ流合理主義に依拠し、主に体力論によって「柔よく剛を制す」を否定して「体重制」に賛成。
- ③「折衷型」…「保守型」のいう「柔よく剛を制す」や「精力善用・自他共栄」という理念を認めながらも、「革新型」のいう体力論や、あるいは軽量者にも試合に勝つ喜びを与える必要を唱えて「体重制」に賛成。
- ④「競技限定型」…競技スポーツとして国際化を促進すべきであるという観点から「体重制」に賛成。また、現実的・実利的観点から、体力に優れた外国人に勝つための方策として「体重制」を導入すべきだという主張もみられる。

永木は、この「体重制」問題への関心は、昭和20年代後半から30年代において集中的に高まっており、その背景に、競技の合理化・国際化を求めるオリンピックの存在をあげている。昭和39年東京オリンピック以後は「体重制」が既成事実になったことからさほど関心が表面化していないとしながらも、現在においても上記の「保守型」や「折衷型」の競技観も潜在し続けており、今日に至ってもどのタイプの競技観が優勢

であるか結論付けることは難しいとしている。

亀田や永木の示した見解から、スポーツにおける競技価値観は、時代によって変化しており一定の形がないことや、競技やそれを取り巻く社会的・文化的構造との関連を考慮し、多角的な視点で分析していく必要性が示唆されている。

3 研究の目的および方法

前項で取り上げた価値観にかかわる先行研究の概観から、「価値観とは何か」やスポーツにおける競技価値観に関する研究がみられた。しかし、これまでの研究では、亀田のように測定尺度の開発や永木のように特定の競技にある問題を取り上げ検討するものが多く、一人の競技者に焦点を当て考察していく研究は少ない。そこで本稿では、先行研究の成果をふまえつつ、特定の競技者の競技価値観について考察していくことを目的とする。

本稿では関連する言説を対象とした分析を方法とし、競技者の競技価値観に関連する言説化されたものを考察の対象とする。なお、本研究における「言説」とは、「分析者の関与とは独立して存在する、書かれたもの」⁷⁾ (口述筆記や伝記) も含んでいる。

なお、本稿で対象とする「スポーツにおける競技価値観」は、前項で触れたように多義的に捉えられるものであるため、具体的な事例を取り上げ分析、検討をおこなう必要がある。本稿では、競技者の競技に対する価値観として、山口県最初のオリンピック選手である阿武巖夫に焦点化し、関連する言説を分析の対象とする。

4 陸上競技選手・阿武巖夫と競技価値観

阿武は、1909 (明治 42) 年 12 月 2 日、山口県阿武郡大井村 (現在の萩市大井) に父・四郎、母・ツネの長男として生まれた。四郎は大井八幡宮の宮司で 2 人にとっては待望の神職の後継ぎであった。阿武の性格は、「ひょうきんで人に好かれる男」⁸⁾ といわれた。幼

い頃から大井八幡宮の馬場をトラックに見立てて走り込みに熱中していた。大井尋常高等小学校 (現在の大井小学校) 時代からランニングの速さは評判であり、県立萩中学 (現在の萩高等学校) 3 年次の 1925 (大正 14) 年には 100m で 11 秒 6 の県体新記録をつくっている。その後、山口鴻城中学 (現在の山口県鴻城高等学校) に転校し^{註1}、1928 (昭和 3) 年 9 月に第 14 回全国中学校大会で 100m 11 秒 4、200m 23 秒 0 と両種目を制覇したことで中学生スプリンター日本一になっている。進学した慶應義塾大学では、1929 (昭和 4) 年、第 5 回明治神宮大会兼第 16 回日本陸上競技選手権で 100m 2 位、日本学生選手権でも 100m 4 位、200m 3 位になっている。1930 (昭和 5) 年には、関東選手権で日本初のオリンピック金メダリストである織田幹雄と 100m を走り敗れているが、その後 200m 障害でマークした 24 秒 3 の日本記録は、1969 (昭和 44) 年まで破られなかった。同じく 1930 年 5 月に東京で行われた第 9 回極東選手権には日本代表として出場した。100m で後年「暁の超特急」と呼ばれる吉岡隆徳 (東京高師) が同種目で日本初優勝し、3 位に南部忠平 (早大)、阿武は 5 位であった。また、阿武は競技生活中、400m リレーで 2 度の日本記録を作っている。1 つは同年 6 月に織田、佐々木吉蔵 (東京高師)、吉岡のメンバーで出した 42 秒 6 であり、2 回目は 1931 (昭和 6) 年 10 月に佐々木、吉岡らと出した 41 秒 6 である。第 10 回ロサンゼルスオリンピックの年である 1932 (昭和 7) 年 5 月の日本選手権兼五輪 100m 最終予選では、吉岡の 10 秒 7 に次いで 10 秒 9 で準優勝、200m は 22 秒 3 で優勝したことでオリンピック代表権を獲得し、山口県が送り出す初めてのオリンピック選手となっている。阿武の競技歴については、当時の陸上競技が発展途上期であったとはいえ、その高度なパフォーマンスに突出したものを見ることができる。記録や成績としては時代の違いはあるものの、現在でも高いレベルであることには違いない。ロサンゼルスオリンピックでは、100m 第 1 次予選 3 組に出場し 3 着で予選を通過したが、

第2次予選で4着となり落選している。しかし、400mリレー（吉岡・南部・阿武・中島）では5位に入賞した。その後、1933（昭和8）年に慶応大から中央大へ移り活躍するが、1935（昭和10）年に日本学生選手権大会400mリレー、中大チームで2位の記録を最後に現役を退いた。1938（昭和13）年には、日中戦争のため阿武自身も中国大陸に出征し、1939（昭和14）年12月、30歳誕生日の3日前に中国軍の迫撃砲攻撃により戦死している^{註2}。

阿武は中学時代から短距離のトップ選手として活躍したが、その活躍の背景には当時の萩中学の岩田博蔵校長が陸上競技を奨励したことも影響しているのであろう^{註3}。残念ながら萩中学や山口鴻城中学における阿武自身の言葉は残されていないが、大学以降ではいくつかみることができる。

まず、阿武はマニラ遠征記⁹において、1934（昭和9）年に開催された第10回極東大会の報告を行っている。報告の中では、当時の満州国参加問題^{註4}に揺れる日本の中で非難されながらも国の代表として参加しなければならない苦しい心情が述べられている^{註5}。そこには、陸上選手として勝利の追求や記録への挑戦だけではなく、国際情勢や国内の政治にも翻弄されながら競技に取り組む当時の陸上選手の様子がわかる。岡部は先行研究の中で、1930年代前後の競技スポーツは、国家儀礼と結び付けられ、皇族や国旗、国歌といったシンボルを組み込んだものであり、国家的秩序への同意を強化し、国家との一体感をおし進める装置として機能していたと述べている。この政治とスポーツの関係性は当時のスポーツ選手の競技価値観に強い影響を与えていると思われる。

また、阿武巖夫選手伝記では、阿武の競技観をうかがえる小論文として、1936（昭和11）年の雑誌「陸上競技」を紹介している^{註6}。このころにはすでに競技は引退しているが、日本の短距離界の競技力向上のために発言していることがうかがえる。また、阿武は引退後に陸上競技の専門雑誌「陸上画報」を作成している。

そこでは、具体的に下記のように日本短距離界の立て直しを訴えている。

「4年後の東京オリンピックは、二度と失敗を許されない。いかなる犠牲を払っても強力チームを組織し是が非でも勝たねばならない」^{註7}

阿武は上述のように国を代表する競技者の覚悟を「いかなる犠牲を払っても」と表現しており、そこには阿武をはじめとした国を代表する陸上選手への期待と重圧の強さが見て取れる。また、阿武は大学時代に早慶戦の100mに優勝しながらも父親の怒りを買っており^{註8}、一流競技者が背負った精神的重圧の強さが、彼の競技に対する思いや国を代表する者への覚悟を作っていたのではないかと推察された。

5. まとめ

以上の考察から、次のようにまとめることができる。

阿武は競技者として国際レベルで活躍し、戦死というかたちで人生に終止符を打った。関連する言説に着目したところ、阿武の競技価値観には、競技に対して非常にストイックであり、社会からの期待に答えようとする意志と日本の短距離界の発展に尽くす強い責任感がみえた。それは彼が幼い頃から陸上競技のトップ選手として活躍したことから、周囲からの過剰な期待や競技における勝利を求められた社会的圧力の中で育まれたのであろう。しかし、その重圧をもって25歳という若さで現役を引退する決断をしたのではないかとと思われる。現役引退後には自ら陸上競技の専門雑誌を手掛けるなど日本の陸上競技界の発展に尽力していた。

本稿における考察から、競技者の価値観はその時代の社会的背景の影響を強く受け、そのうえで競技者自身を取り巻く環境の中で確立されていくものと言える。とりわけ、山口県最初のオリンピック選手となった阿武に関していえば、幼い頃から陸上競技のトップ選手として活躍してきた彼への期待にスポーツを国家戦略

として取り入れた社会の風潮も重なり、一競技者としての競技に対するストイックさに加え、陸上競技の発展に尽くしたいという強い責任感を形成していったのではないかと推察された。

スポーツにおける競技価値観についてはその構造や論理を明確にすることは困難であるが、わが国における競技スポーツのどのような特質が、競技者の価値観を確立していくのか。今後の研究課題としたい。

【註】

註 1 阿武巖夫選手伝記の中で、いとこの陽 洪子さんは転校の理由について、阿武がいたずらばかりして萩中の先生が困ったからではないかと述べている。

註 2 阿武巖夫選手伝記では、中国に出征してから阿武の死に至るまでの状況を掲載しており、戦地の状況についてもふれられている。記事では、阿武が戦地に赴く前後に述べた言葉についても掲載されており、当時の彼の心情についても推察されている。また、阿武に召集令状が届き、山口 42 連隊に補充兵として入隊する際に述べた言葉が語られている。実弟の阿武哲也さんの記述によれば、阿武が実家の家業を継ぐ意思があったことや、軍隊への召集に消極的であったこと、万一戦死した際に残された者たちのことを考えての言葉が並べられていた。

註 3 阿武巖夫選手伝記によると、1916 (大正 15) 年、愛媛県松山中学校校長から転じてきた岩田博蔵校長は、とりわけ陸上競技を奨励した。その頃県下の中学校では野球が相当流行していたが、萩中学では金のかかる野球にはなかなか手が出せなかった。また、たとえ野球に乗り出したとしても、鉄道もない田舎とて、対外試合の相手さえもないうえに遠征には旅費がかかるというので、結局岩田校長が、相手がなくても記録に挑むことによって愉快地にスポーツを楽しむことができ、そのうえ野球に比べてはるかに経費も少なくてすむ陸

上競技を全校生徒に奨励することになった。

註 4 1931 (昭和 6) 年に発生した満州事変により満州国が誕生した。満州国の誕生には大多数の日本国民が賛成していたが、満州国に対し否定的な国際社会からの批判を遮り、日本は国際連盟からの脱退を選択する。満州国参加問題は、極東大会において日本は満州国の参加を促進し、他方中国は満州国の参加を真っ向から反対し激しく対立したことをいう。また日本国内では極東大会へのボイコット運動が起こり、選手たちは政治とスポーツの緊張関係に巻き込まれた。

註 5 阿武によれば、第 10 回極東大会への参加には国内から非難の声が多く、強い覚悟をもって参加したことが推察された。以下、阿武の報告の一部である。

「国際競技に参加すること三度。三度とも惨敗の憂目を見ながらも別れ得られない運動生活である。七転八起を目標に此の極東大会を目指してあらゆる努力と犠牲を払って来た。

幸にして代表選手と成る事が出来宿望の第一歩を踏み出した時、たまたま満州国参加問題に端を発し、非難の声を後に神戸を出帆しなければならない寂しい状態になってしまった。然し国賊の汚名も敢えて甘受し、強い信念をもって意気揚々とマニラに乗り込んだのである。

自分にとって或いは最後となるかも知れない国際競技である。如何にしても好成績を残さなくてはならないこの一戦であると思ひ、常に細心の注意を払い堅い決心をもって大会にのぞんだのである。然し、結果に於ては又しても淋しく敗惨の将と成って永久にマニラの地に名残りを残してしまった。

二百米に落選した此の五月十六日こそ自分に取って今迄味はった事のない悲しみの日であると同時に、限りない苦痛となって永遠に残る日である。何の面目あって故国の土地を踏む事が出来やうか、吾々代表部のもつ主義主張も勝ってこそなされるものであ

る。勝ってこそ満州国参加問題も難なく解決されるものであると確信して居た自分に取っては、此の惨敗こそ頭から鐵鎚を打たれたかの如き痛手であった。(以下、省略)

また、市原¹⁰⁾は、同大会に400mハードルの選手として出場した際の感想を報告している。以下、その報告の一部である。

「それにしても想ひ出されるは参加に絡む出発当時の諸事件である。非国民、国賊とまで汚名を受け乍ら、我等はそれを押切ってやって来たのではないか。平洋丸にて帰国の途上にある今日其等のことも今では過去のよき想出と化し、満州国参加問題解決の一大土産を持って祖国に向ふ我等の喜びや如何程ならんや。今ぞ真に国を愛し国を憂ふる者は誰であったか」

註6 「ロス五輪以来、わがスプリント界の躍進めざましく、目前に控えたベルリン大会は活躍が期待できる。第一線とともに第二線も一層の努力をしなければならぬ。“ある選手はあまり練習しないが実に強い”という風説が立つと第二線にあるものが直ちにそれをまねる。いかに天才児であろうと努力しないで強くなれる道理がない。かくいふべくも練習しない標本のように思われていたが、それは認識不足である。

四百mの日本記録保持者中島亥太郎君もその一人。豪放な性質から見た風評に過ぎない。おそらく彼ほど猛練習した者はない。ロス五輪前、その努力はとうてい我々の及ぶものではなかった。彼はぼくに対して常に小言をいった。“君は練習が足りない”この言葉がいつもぼくの頭の中に浮かんでくる。第二線にある諸兄よ、一流選手足らんと欲するなら人一倍苦心をすることを忘れてはならぬ」

註7 1941(昭和15)年に開催予定だった東京オリンピックは、日中戦争の影響もあり開催に至っていない。

註8 早慶戦の100mに優勝した阿武は写真と記事を切り抜き父親に送ったところ、「お前はたった1mしかよう勝たんのか」と激高されている。

【引用文献】

- 1) 岡部祐介ほか(2010)「マラソン競技者・円谷幸吉の自死に関する一考察—競技スポーツおよび競技者の問題性との関連から—」『スポーツ教育学研究』30(1), 13-23
- 2) 一般社団法人山口陸上競技協会『山口陸上競技協会の発足と変遷』<http://yaaf.jp/aboutus.html> (アクセス日 2019.10.16)
- 3) 岡本厚(2018)「広辞苑(第7版)」岩波書店, 572
- 4) 花井友美(2007)「「価値観」をめぐる諸研究: 国家・民族・時代による価値観の違い」『「エコ・フィロソフィ」研究』1, 105-128
- 5) 亀田里奈・吉川政夫(2006)「スポーツの競技価値観に関する心理学的研究—スポーツ競技者の競技価値観尺度の作成」『東海大学紀要』体育学部 36,111-119
- 6) 永木耕介・入江康平(2002)「戦後柔道の体重性問題にみる競技観の諸相」『武道学研究』35(1), 1-13
- 7) 赤川学(2001)「言説分析とその可能性」『理論と方法』16(1), 89-102
- 8) 大井ふる里愛好会(2001)『山口県最初のオリンピック選手 阿武巖夫選手伝記』萩印刷有限会社, 197
- 9) 阿武巖夫(1934)「又しても敗戦の将として」『マニラ遠征記』日本陸上競技連盟, 117-119
- 10) 市原正雄(1934)「真の憂国者は誰」『マニラ遠征記』日本陸上競技連盟, 119-121

【参考文献】

- 1) 岡部祐介(2015)「わが国における「競技者アイデンティティ問題」の言説の成立—テニスプレーヤー・佐藤次郎(1908-1934)に着目して—」『至誠

館大学研究紀要』1, 1-11

- 2) 坂上康博（1998）「権力装置としてのスポーツ」講談社, 286
- 3) 岡部祐介（2018）「高度経済成長期におけるスポーツ実践の思想：バレーボール指導者・大松博文に着目して」『関東学院大学『経済系』』274, 11-23
- 4) 萩ネットワーク協会（2000）「山口県最初のオリンピック選手 萩市大井出身 阿武巖夫選手」『萩ネットワーク』35, 8-9
- 5) 富田幸祐（2016）「日本における第10回極東選手権競技大会ボイコット運動の展開」『体育学研究』61, 43-58
- 6) 大隈節子（2008）「スポーツ競技者のアイデンティティ」『変わりゆく日本のスポーツ』82-93
- 7) 大橋道雄（2005）「スポーツと勝利至上主義」『教養としての体育原理 現代の体育・スポーツを考えるために』127-129
- 8) 阿武巖夫（1934）「玉砕する覚悟」『オリムピック大会報告 第10回』日本陸上競技連盟, 112-116